

『カール・バルト 滝沢克己書簡集』について

寺園, 喜基
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/1564240>

出版情報 : 哲学論文集. 50, pp.185-188, 2014-12-26. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :



『カール・バルト 滝沢克己書簡集』について

寺 園 喜 基

このほど『カール・バルト 滝沢克己書簡集』を校了した。これは神学者カール・バルトと滝沢克己先生の間で一九三四年から一九六八年までに交わされた八一通の書簡の翻訳であり、注と解題を付した。滝沢先生は一九四七年に倫理学講座に赴任し、一九七一年退職されたが、本論文集にも第三輯と第七輯に寄稿しておられる。ここでは二点ほど触れておきたい。（以下では敬称を略す。）

第一は、フンボルト財団への報告書についてである。滝沢はこの財団の奨学生として一九三三年秋にベルリン大学で哲学を、翌年春からはボン大学でバルトのもとで神学を学んだ。バルトはしかしヒトラーへの忠誠誓約拒否の故に

罷免され、一九三五年にバーゼル大学に移ったので、滝沢は最後の夏学期はマールブルク大学のブルトマンのもとに行った。滝沢は一九三五年秋に帰国したが、帰国を前に担当主事ゲッペルに長文の報告書をかいている。その中にこういう文章がある。

「敬愛するゲッペル博士、ドイツの大学から追放されたカール・バルトについてこのように書くのを、どうか悪く思わないでください：彼が今とうとうドイツの大学から追放されてしまったということは、ドイツにとって非常に深く憂慮すべきであると言う以外に仕

方がありません。わたくしはここでもまた、政府がバルトの神学を公正な意志をもってドイツ民族のために危険であると理解した、と信じています。しかしわたくしが彼を今まで理解している限り、あえて言わねばなりません、それは完全な誤解だったのであり、バルトに関して起こっていることは全て、結局は認識不足から派生したものであります。」「国家社会主義の関心事は：われわれが生まれ成長している血と土地の上で現実的に、事柄に即して議論することであります。人は血と土地から完全になつて問題を扱うことは決してできないし、また決して扱うことは許されない、ということ誰が拒否するでしょうか……ただ重要なのは、血と土地は、われわれ自身の行為が規定されるべき究極の根拠、究極の現実であり得るかどうか、ということです」。(第9a書簡)

滝沢はここで文部大臣によって罷免処分を受けたバルトを擁護し、またナチス・イデオロギーを批判しているのである。だが、フンボルト財団が政府機関に属するものであ

ることを考慮するなら、これは大変なことだったのでなかろうか。戦前の滝沢の国家主義的傾向を指摘する声もきくけれども、決してそうでないことが分かるであろう。また、滝沢は戦後、バルトに「自分が愚かしい戦争を阻止するために実際には何もできなかったことを、恥じています」(第26書簡)と書いているのである。

第二はバルトの滝沢への反批判についてである。滝沢は西田幾多郎の勧めによつてバルトのところへ学んだ。そして滝沢によれば、西田哲学において喜びをもつて発見した当のものをバルトにおいてもまた発見したのである。だがそれにもかかわらず、滝沢には一つだけどうしても承知できない問題があった。そしてこの問題がバルトに対する終生の問いとなるのだが、この滝沢の主張をまとめて言えば、こういうことである。人間の存在を普遍的に規定する原事実・インマヌエルの原事実が存在する。これはナザレの人間イエスの誕生の前からすでにあったのであって、イエスにおい初めて成立したのではない。むしろ、イエスにおいて成立したのはインマヌエルの原事実の徴なのであ

る。人間イエスはこの原事実を完全な形で生きて見せたのである。しかるに、と滝沢は言う、バルトはイエス・キリストという名において、根源的な原事実と人間として生きた徴とを区別せずに、同一化してしまっている。大切なのは歴史の根源にある原事実であつて歴史上の徴ではないのに、両者を混同することによって、バルトにおいてはイエスの絶対化が、それに応じて、キリスト教の絶対化が起こつてくる。だからまた、聖書や教会の絶対化が起こつてくる。したがって、バルトは聖書原理の立場に立ち、インマヌエルの原事実を聖書の外でまた教会の外で認識することは原理的には可能であるが、しかし実際的には不可能である、ということになる、と批判するのである。このような批判を滝沢は書簡の中でも、論文や著書においても繰り返して述べている。

バルトがこれに対して直接的に応答しているのを著作物の中では未だ見ていないが、この書簡集の中で見出すことができる。

「…あなたはアンテオケ派のキリスト論に立ち続け、

真のエファパックスを理解できませんでした。そして今あなたはわたくしに、まさに『この』問題が——わたくしはまさしくこれがそうだと認めます——なおも在り続けていると書いています。ああ、愛する滝沢さん、これはしかし悲しいことです。これはあなたが生きている間に解決されねばなりません。と言つても、すべてはまったく単純なのです。否、しかしながら、これはそう簡単でもないということをわたくしはすでに知っています」。(第27書簡)

「わたくしは今まであなたと、聖書的にも実際的にも不可能であるといふことについて議論してきていません。しかし今…あなたがそれらの理由(『聖書原理』など)をわたくしに於てはめよとする限り、それはただ一つの『誤った』理解による議論に過ぎないと受け取ることしかできません。…つまり、あなたは何時もほんの少しばかりわたくしの脇を通り過ぎて考えまた語つたことです。——わたくしは、あなたが『教会の壁の内と外におけるキリストの支配』の關係に関

してわたくしを探し、また見出した所にはないので
す」。(第40書簡)

「大麥謙遜で注意深く主張している、あなたの『教会
教義学』に対する保留において、真剣な障害が問題に
されているのか、それともイメージ的なものが問題に
されているのか、ということがわたくしには未だ透明
ではありません」。(第42書簡)

このように、バルトは滝沢への書簡においてはつきりと
した反批判を行っている。また、自身の『教会教義学』の
或る箇所を挙げて、「虚心にもう一度良く読んでみてくだ
さい」とか、或る分冊の校正刷りを送って、そこにおいて
は「あなたが長い間扱ってきた問題が論じられているので
はないでしょうか」とも、書簡に書いている。深い信頼関
係にみちた師弟の交わりと神学的立場を異にした緊張関係
とが読みとれる書簡集は興味がつきない。

(九州大学名誉教授)